

厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）
総括分担研究報告書

研究代表者 石井礼花 東京大学医学部付属病院（届出研究員）
ペアレントトレーニングの効果測定のための日本語版児童愛着面接/
親子社会サポート評価面接/生物学的指標評価の実用化と実施者養成研修カリキュラム
の開発-オンライン提供を含めて」に関する研究

研究要旨：本研究では、発達障害や慢性疾患を持つ児の親のペアレントトレーニングの効果を評価する為、愛着の安定性を測定する Child attachment interview (CAI) の日本語版、親子への社会サポートの量と質を評価する面接法、磁気共鳴画像 (MRI) による客観的指標の開発実用化を行った。また、評価を行う人材育成ペアレントトレーニング実施者養成研修の確立を目的とした。

●研究代表者：石井礼花 東京大学医学部
部附属病院（届出研究員）

I. 総括研究報告

本研究では、発達障害や慢性疾患を持つ児の親のペアレントトレーニングの効果を評価する為、愛着の安定性を測定する Child attachment interview (CAI) の日本語版、親子への社会サポートの量と質を評価する面接法、磁気共鳴画像 (MRI) による客観的指標の開発実用化を行った。また、評価を行う人材育成ペアレントトレーニング実施者養成研修の確立を目的とした。

Child Attachment Interview (CAI) 日本語版の確立と面接実施者養成カリキュラムの開発という当初の目的は、ほぼ達成できた。MRI 検査については、愛着に関連する脳部位の特定にまでいたった。発達障害のペアレントトレーニングの RCT は、60 組を目指しているため、あと 18 組を組み入れたい。今年度の COVID-19 の感染状況を鑑みて、MRI 撮像を含んで 42 組の組み入れを完了しているのは、解析が可能などころまで達成したと言えるため、達成度は高いと考えられる。

また、ペアレントトレーニングの実施者養成研修については、テキストの作成を完了し、プログラムを作成、2 回の研修施行が完了し、さらには、継続して国立精神神経

医療研究センターの研修に組み込むことができたため、成果は大きいと言える。

慢性疾患の児のためのペアレントトレーニングも、プログラムを確定し、15 名に行うことができた。

今後実装に向けて、RCT の完了し、効果を分析し論文文化国際学術雑誌に出版し、その上で、ペアレントトレーニングを医療として提供できるように、保険診療化を目指して学会とも協調しながら真の実装化に向けて進めていく必要がある。

II. 分担研究報告

分担課題「研究全体デザイン、社会サポート評価の開発、脳画像評価開発、ペアレントトレーニング実施者養成研修の確立」

A. 研究目的

目的1) バイアスの少ないペアレントトレーニングの評価法開発 (CAI、社会サポート、MRI 信号) と その評価者養成: ランダム化比較試験の評価指標として開発研究している CAI、社会サポート評価、MRI 信号について施行を続け解析し有用性検討と実用化。

目的2) オンラインでの提供も含めたペアレントトレーニング (発達障害) と実施者養成

本研究により、期待される効果は以下の通りであった。

1. 【バイアスの少ない効果評価法の実用化】国際的に確立されたバイアスの少ない児童の愛着の評価法を日本語での施行/面接者養成する事は、必要性和有用性が高い。世界的にも、ペアレントトレーニングの効果を CAI や社会サポート、MRI 信号で評価する研究は先駆的である。

2. 【育児への社会サポートの向上】世界的にみても重要性が注目されている育児への社会サポート を評価する面接法を確立、面接者養成を行い実用化する。育児への社会サポートの重要性のエビデンスを確立する事により、子育て支援における政策への影響も期待できる。

3. 【治療選択の根拠の質の向上による医療経済的寄与】国際的にも客観的な効果検証が乏しいペア レントトレーニング について、MRI 信号での客観的指標による評価を開発実用化する事により、適切な治療選択につなげられる可能性がある。

4. 【治療および実施者養成プログラムへのアクセシビリティ向上】オンライントレーニング参加も 可能としてペアレントトレーニングおよび、実施者養成研修を提供する事により、COVID-19 流行による移動制限下、また、ワーキングペアレントや、ペアレントトレーニングを提供する機関にアクセスが難しい地域の患

者にも参加可能となる。現況での実施者養成も確実に進め、育児中でトレーニングに参加しにくかった実施候補者のニーズにも応える事ができる。

B. 研究方法

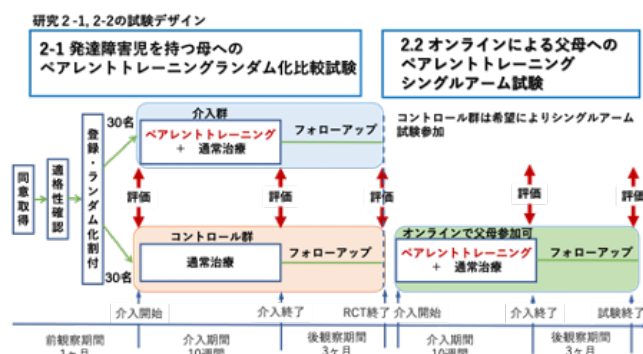
本研究では、ペアレントトレーニング(PT)の評価法開発とその評価者養成、オンラインでの提供も含めた PT 開発と実施者養成を行う為、以下の研究1から3を行った。

研究 1. PT の評価法開発とその評価

者養成

1-2. 社会サポートネットワーク評価面接(石井):アイオワ大学の Ashida と国立衛生研究所(NIH)の Kohley と共に、コンボイ法を用いた親子への社会サポートについての日本語での評価法を2019年に開発した。オンラインでの評価を可能とし、オンライン評価面接者養成研修の開発を行った。

1-3. 愛着と社会サポートに関連した MRI 信号(石井):東京大学にある3テスラ MR 装置を用いてムービー鑑賞時の脳活動及び脳構造の撮像を行い、親子の脳活動の同期の程度の評価、CAI による愛着の質と社会的サポートの量に関連する MRI 信号を検出し、実用可能な解析法を見出した。



研究2：評価法の妥当性検討と実施者養成

成パイロット研修のためのPT

2-1. 発達障害児を持つ母へのPT ランダム化比較試験(石井)：対象と目標症例数は8～12歳の発達障害児と親60組。現在東大病院では、通常診療のみを受ける群をコントロール群(CL群)としたランダム化比較試験(RCT)を既に開始している。介入群は、6組程度の発達障害児と親で1グループとし、計30組10週間のPTに参加。CL群は、PTに参加せず、通常診療のみを受ける発達障害児とし、介入群と同数を対象とする。介入前後と3ヶ月後に、児に対しCAIの面接を行い愛着評価、3テスラMR装置を用いてMRI検査。親のストレス指標、児の行動・情動制御指標、臨床症状も評価する。また、COVID-19の影響を踏まえ、オンライン参加も可能とする。

2-2. オンラインによる父母へのPT シングルアーム試験(石井)：CL群以外の参加希望者も含めて30組を目指した。CL群はRCTの3回目検査後にPTに参加可能とした。RCTについては、予備試験での結果をもとに母親のみの参加としたが、CL群に提供するPTについては、COVID-19による影響を踏まえ、オンライン且つ父親も参加可とする。シングルアーム試験の前後でRCTと同様の評価を行った。

研究3：PT実施者養成プログラムの開発

研究2-4のRCTとシングルアーム試験で施

行したPTプログラムのパイロット実施者養成研修を発展させて、オンラインでの研修プログラムを作成、提供した。

【研修プログラム開発に向けての意見収集】

・各学会、実施施設の協力を得て、PT実施者等(専門家、行政、医療、福祉、教育等の支援者・関係者)の意見を聴取した。

(倫理面への配慮)

本研究は人を対象とした医学的研究であるため、ヘルシンキ宣言および人を対象とする医学系研究に関する倫理指針に基づき倫理面について十分な配慮のもとで遂行している。

【倫理的配慮・倫理委員会による事前審査】研究の実施に先立ち、研究機関の設置する独立した委員会から計画の事前審査を受けた。さらにランダム化臨床試験については、東京大学附属病院および国立成育医療センターでのプロトコルの承認を得た。また、両施設とも、臨床試験施行前に臨床試験登録システムに登録してから開始した。

【インフォームドコンセントの取得・情報の開示】全ての検査に先立ち、各被験者に対して本研究の目的・検査方法を説明し、被験者の匿名性が守られること、希望があれば被験者本人に対してその結果が開示できること、研究への参加はいつでも自由に取り下げることが出来ること、本研究の成果は、個人情報保護に十分配慮した上、学術集会や学術誌で公表される可能性があることについて説明した。検査実施に際して、文書による同意を得てから検査を開始している。検査期間を

通して被験者に不利益が生じないように努め、治療に差し障りがないように配慮した。

【個人情報の取り扱い】本研究の被験者については、個人が特定できないよう、イニシャルおよび症例番号によって匿名化を行っている。研究過程で得られた各被験者のデータはデジタル化され、データファイルとして記憶媒体に保存された。記憶媒体には専用ソフトウェアによるパスワードロックが施された。データは東京大学医学部附属病院では研究代表者である申請者が、鍵のかかる保管庫で管理する。ランダム化された個人情報については、東京大学治験審査委員会の鍵のかかる保管庫、およびデジタル化された情報は鍵のかかった部屋のパスワードロックのかかったコンピュータに保存している。

【利益相反】研究結果の公正性・信頼性を確保するため、研究の利益相反には適切な対応を行っている。具体的には、研究を発表する際、研究助成を受けた場合には利益相反の観点から、どの機関、企業からどのような助成を当該研究のどの部分にうけたのかについて明記した。

C. 結果

研究 1. PT の評価法開発とその評価者養成

1-2. 社会サポートネットワーク評価面接(石井): ADHD 児 50 名とその母 49 名、父 17 名、また定型発達児 67 名とその母 50 名、父 20 名に対して行なった。またオ

ンライン実施者養成研修を 3 名に対して行なった。ADHD 児において、定型発達児よりも社会サポートが少ないこと、母への社会サポートが多いほど児の愛着が安定するという関連が認められた。

1-3. 愛着に関連した MRI 信号(石井): MRI 撮像を ADHD 母子 43 組、定型発達母子 21 組に対して行なった。

線形回帰分析にて、母親への愛着からネガティブ情動、父親への愛着からネガティブ情動の有意な負の関係性が示された。また、父親への愛着から児の脳部位体積、母親への愛着から児の脳部位体積に有意な負の関係性が認められた。さらに、児の脳部位体積からネガティブ情動の有意な正の関係性が示された。

研究 2: 評価法の妥当性検討と実施者養成 パイロット研修のための PT

2-1. 発達障害児を持つ母への PT ランダム化比較試験(石井): PT を 21 名に施行した。(2022 年 5 月までに RCT に登録完了は計 44 名)

2-2. オンラインによる父母への PT シングルアーム試験(石井): オンラインによるプログラムを開発の上、17 名に施行した。

2-3 慢性疾患児を持つ母への PT シングルアーム試験 (田中): オンラインプログラムは作成完了し、慢性疾患児の保護者に向けた OSP (全 5 セッション) を 2021 年 6 月より開始し、2022 年 2 月までに 4 クール、参加希望者 18 名中、全 5 セッション

参加者は15名（父親4名、母親11名）、途中辞退者は3名（母親3名）であった。参加者15名の平均年齢は、父親45.00歳、母親44.27歳だった。

研究3:PT 実施者養成プログラムの開発

【実施者用教科書作成】

現在東京大学で施行しているPTプログラムをもとに、実施者が施行するうえでスムーズに行えるように解説を加えた実施者用教科書を作成完了した。

【実施者養成プログラム】

オンラインにて提供するプログラムを作成し、2021年12月14日と2022年1月18日に施行した。もっとも重要と考えられる、「行動を3種類に分ける」、「してほしい行動に注目する」、「褒めることを習慣にする」のパートについて理解できた、とてもよく理解できた、の回答が100%であった。参加者の感想を以下に紹介する。「具体的なポイントがよくわかった。実際に医療機関でペアレントトレーニングを行うとすると、研究ベースでなくやるにはどうしたらよいか見当課題だと思った。」「ほめる」ことの重要性、そもそも「ほめる」とはどういうことなのか、といったことの理解が深まった。」「ほめるスキルについてとても具体的、実践

的に学ぶことができた。子供のできていないところに向けてしまいがちな両親の視線を、子供の良いところを探す方に向けることで、様々な良い影響が生まれていく仕組み、またグループワークで本人だけでなく両親の傷つきも支えられるような工夫が随所に散りばめられていて、今後の臨床に活かしていけそうだと感じた。」「様々な情報が溢れている中、何をどう伝えればよいかについての情報を抽出してわかりやすくまとめてくださり、とても勉強になった。」「実際にロールプレイを交えながら自分が経験することで、ほめることの重要性など各セッションのポイントの重要性をより感じる事ができた。また、参加者側の気持ちを感じる経験にもなった。今後ペアトレを実践する際に活きる、とても良い経験になったと思いました。進めてくれる先生方が、ペアトレのほめの精神で受け答えして下さったので、そこもペアトレの感じを体感するものになった。」

E. 考察

ADHD 児の母への愛着の安定性と母への社会サポートの多さとの関連について明らかにしたこと、また、愛着と社会サポートに関連する脳部位を同定したことは、新規性の高い成果である。今後、医療サポートを強めていく上で、考慮していくべき課題と考えられ、臨床的にも意義が高いと考えられる。

オンライントレーニング参加も可能としてペアレントトレーニングおよび、実施者養成研修を提供する事により、新型コロナウイルス感染症の流行に伴う外出制限中、また、ワーキングペアレントや、ペアレントトレーニングを提供する機関にアクセスが難しい地域の患者にも参加

テーマ	内容
① ADHDとペアレントトレーニング	ADHDについて/医療機関におけるADHD児の親へのペアレントトレーニングについての講義
② 導入/プログラムの進め方	プログラムの流れ、グループのルールの講義とワーク★
③ 行動を3種類に分ける	第一回「行動を3種類に分ける」の講義とワーク
④ してほしい行動に注目する/ほめることを習慣にする	第二回「してほしい行動に注目する」・三回「ほめることを習慣にする」の講義とロールプレイ★
質疑応答	前半の内容についての質疑応答
⑤ してほしくない行動への注目を取り去る	第四回「してほしくない行動への注目を取り去る」、第五回「注目を取り去る計画を立てておく」の講義とロールプレイ★
⑥ 指示の出し方	第六回「指示の出し方」の講義とロールプレイ★
⑦ ほめほめ表	第七回「ほめほめ表の作り方」、第八回「ほめほめ表の実践」の講義とデモンストレーション
⑧ 限界設定のルールを提示する	第八回「限界設定のルールを提示する」の講義
⑨ 環境調整/学校との連携/まとめ	第九回「環境調整」、第十回「修了式」の講義とワーク★
⑩ ペアレント・トレーニングの実践に向けて/質疑応答	グループ運営上のポイントや配慮点の講義、質疑応答
	上記の各回は、実際のグループで実施するものに相当する
	★はファシリテーター体験をするもの

可能となる。現況での実施者養成も確実に
行え、育児中でトレーニングに参加し
にくかった実施候補者のニーズにも応え
る事ができた。実施者養成プログラムへ
のアクセシビリティ向上により、ペア
レントトレーニングを行うことのできる人
材を各医療機関に増やすことが可能とな
り、保険診療へとする第一歩となった。

E. 結論

本課題の研究成果により、発達障害の患
者とその親へのサポートを効果的に行な
っていく方法として、発達障害を持つ児
へ社会サポートについての実態把握がで
き、また、医療が提供できる社会サポート
としてのペアレントトレーニングの効果
を測定できた。

さらに、COVID-19 流行による影響が心配
される中、オンラインで行うというニー
ズにも応えられる成果が得られた。ま
だ、RCT 途中のため、結果の解析を行な
っていないため、CAI、SSN、MRI の介入前後
の変化はとらえられていないものの、評価
法開発は順調に進められた。MRI 検査につ
いては、愛着に関連する脳部位の特定にま
でいたった。

本研究の最終成果を、実装化における阻害
要因と考えられる費用面の問題をクリアす
るための診療報酬化への根拠とすることが
重要課題である。

F. 健康危険情報 特になし

G. 研究発表

[論文発表]

A. Suzuki, R. Yamaguchi, L. Kim T. Kawahara, **A. Ishii-Takahashi**
Effectiveness of mock scanners and preparation programs for
successful magnetic resonance imaging: a systematic review and

metaanalysis Pediatric Radiology. 2022 In press

[ガイドライン]

石井礼花「ADHD へのペアレントトレーニング」注意欠如・
多動症 ADHD の診断・治療ガイドライン 第5版 In
press じほう

[学会発表]

1. 石井礼花, 新谷美穂子, 廣瀬愛希子, 草
間千絵, 鈴木茜音, 金 里沙, 中島直美,
金生由紀子: ADHD 児とその親への社
会サポートネットワークへの COVID-
19 感染拡大の影響. 第 117 回日本精神
神経学会学術総会, オンライン,
2021.9.21.

[招待講演]

2. **石井礼花**: 思春期の理論～思春期の特
性を学ぼう. 日本小児科医会 第 20 回
思春期の臨床講演会, 2021.11.14.
3. 石井礼花 ADHD 児の親へのペア
レントトレーニング研究から実装まで
第 64 回日本小児神経学会学術集会
共済シンポジウム 小児期 ADHD の
心理社会的治療 2022.6.03
4. 石井礼花 注意欠如・多動症の児童の
長期追跡 MRI 研究のシステムティッ
クレビュー 委員会シンポジウム 4
PCN 編集委員会 精神医学の到達点
と展望 第 118 回日本精神神経学会学
術総会, 2022.6.16

[受賞]

石井礼花: 第 117 回日本精神神経学会学術
総会 一般演題 優秀発表賞: ADHD 児
とその親への社会サポートネットワークへ
の COVID-19 感染拡大の影響. 2021.9.21.

●研究分担者: 向井隆代
聖心女子大学現代教養学部 (教授)
分担課題「ペアレントトレーニングの効
果測定方法(半構造化面接(CAI))の実

施者養成のための研修プログラムと教材の開発」

A. 研究目的

ペアレントトレーニングの効果を査定する方法は、これまで保護者記入によるアンケートが多く、保護者による観点だけでは評価に限界があるにも関わらず、児童自身を対象とする方法は用いられていなかった。ペアレントトレーニングが児童と保護者の関係に与える効果を確認するためには、トレーニングの前後で児童自身をインフォーマントとして効果を検証する方法の開発が急務である。

CAI は、45 分程度の半構造化面接により、8 歳から 15 歳の児童の愛着を査定するツールとして、妥当性が検証されている。本研究は、日本人児童を対象とする CAI の実用化を目指し、研修プログラムと教材の開発を行うことを目的とする。

B. 研究方法

愛着査定の方法は、乳幼児を対象とする行動観察(ストレンジ・シチュエーション法)と、成人を対象とする半構造化面接(成人愛着面接)が知られているが、いずれの方法も日本語で研修を受ける機会はなく、英語での研修により許可を得た研究者や臨床家が日本でも実施している状況である。特に半構造化面接は、言語・文化の違いを考慮すると、日本で面接を行う者の研修を日本語で行う必要があり、研修プログラムの開発が急務である。

2020 年度は、CAI 面接要領日本語版の確定と実施者養成研修プログラムの作成を目標として、3 日間のパイロット研修プログラムを用意し、3 名の心理士に研修を受講

してもらい、各自に 2 例ずつ定型発達児に対する CAI の実施を求めた。研修プログラムは、CAI プロトコルの和訳に面接実施例等の補足資料を加え、実施した面接に対する個別フィードバックも含めた。2021 年度は、実施された合計 6 例の面接の内容を詳細に分析し、日本人児童の反応例や日本語で実施する際の課題への対応を含めて、面接者養成研修プログラムを改訂した。並行して、研修教材の一部として使用する定型発達児の面接動画 4 例(8 歳女児 1 名、8 歳男児 1 名、11 歳男児 1 名、12 歳男児 1 名)の作成も行った。

(倫理面への配慮)

本研究は、聖心女子大学研究倫理委員会による倫理審査を受け、承認された後に実施した。特に協力児童と保護者に対しては、書面および口頭による説明の後書面による同意が得られた場合にのみ協力を得た。

C. 研究結果

3 日間の全体研修と 2 例の実施例に対するフィードバックにより 8 歳から定型発達児を対象とする面接者養成は可能であった。ペアレントトレーニング前後で CAI を実施した結果によるペアレントトレーニングの効果検証は、現在進行中である。

D. 考察

日本ではこれまで学童期(8 歳~15 歳)を対象に愛着を査定する方法がなく、質問紙法では非安定型の愛着特に組織化されていない愛着の様相をとらえることは困難とされてきた。一方、半構造化面接の実施には訓練が必要であり、言語・文化の違いを踏まえて面接実施者の訓練を行うためのカリキュラムや面接実施例の作成が必要であ

った。本研究で開発した日本人児童を対象としてCAIを実施するための研修プログラムは、まだ改善の余地はあるものの、ほぼ完成できたと判断する。今後は、定型発達ではない児童の語りの特徴を分析し、医療・福祉・司法領域など幅広い領域で応用できる面接法として提供することを目指す。

E. 結論

Child Attachment Interview(CAI)日本語版の確立と面接実施者養成カリキュラムの開発という当初の目的は、ほぼ達成できた。CAIによりこれまで困難であった学童期の愛着査定が可能になる。引き続き分析を行い、ペアレントトレーニングの効果検証におけるCAIの有用性を検討する。

F. 健康危険情報

特になし

G. 研究発表

なし

●研究分担者：田中恭子

国立成育医療研究センターこころの診療部（診療部長）

分担課題「慢性疾患児を持つ母へのPTシングルアーム試験と実施者養成プログラムの作成」

A. 研究目的

慢性疾患をもつ子どもの自律支援、移行期支援が課題となっている。本研究では、子どもの疾病受容評価を、既存の4要素モデル（理解、認識、論理的思考、選択スキル）に基づいた児童期用面接法を開発し、実臨床で活用すべく、対面インタビュー

ーを通じた、実践および、実践ガイドライン、講習会を計画する。慢性疾患をもつ子どもの自律・移行支援に寄与するばかりでなく、コロナなどストレス下におけるペアレンティングおよび子どもの受容を支援する啓発に繋げることを可能とする目的で行う。

B. 研究方法

- ① 15名の慢性疾患を持つ児と親に対し、慢性疾患に特化したPTをオンラインの提供も含めて整備し、実施した。支援を希望した群に対して介入を行い観察的に追跡し、前後の評価を発達障害へのPTと同様の評価法を用い、妥当性検討した。また、疾病受容評価を子どもに行い、その適用に関して専門家で討議し、児童期慢性疾患をもつ子どもの自律支援としての子どもの意思決定支援に関するガイドラインを作成する。
- ② パイロットPT実施者養成研修(石井・田中):RCTとシングルアーム試験施行に並行し、養成研修プログラムを作成し、東大、成育にいるスタッフに行い、実施者として参加してもらった。

C. 研究結果

2020年度作成した、アタッチメントとトラウマインフォームドアプローチの要素を組み入れた、慢性疾患児をもつ保護者への支援プログラムの完成版を実施した(2021年6月～2022年3月)。慢性疾患児の保護者に向けたペアレントトレーニング(全5セッション)を2021

年6月より開始し、2022年2月までに4クール、参加希望者18名中、全5セッション参加者は15名（父親4名、母親11名）、途中辞退者は3名（母親3名）であった。前後で愛着や親の育児ストレス、子供の問題行動の変化を測定し、予備解析を行なった。

D. 考察

小児医療スタッフの認識強化→疾患をもつ子どもの心理社会的問題（とくに発達、家族機能）に気づく体制の強化（Bio-Psycho-Socialモデル）が必要である。支援側の体制強化→心理社会的支援部門の構築を目指し、リエゾン担当医師（こどものこころの専門医）、心理士、SWなどによる多職種で横断的に関わる支援体制の構築→早期からの地域連携（福祉、教育、医療）の遂行が必要で実施者養成が大事である。慢性疾患を持つ子どもと親は療養体験によるトラウマ症状が持続していた。その支援にはトラウマインフォームドの視点での、オンラインサポートプログラムが有効である可能性がある。

E. 結論

本研究により、慢性疾患を持つ親へのPTが確立、実装化することにより、慢性疾患をもつ子どもの自律・移行支援に寄与するばかりでなく、コロナなどストレス下におけるペアレンティングおよび子どもの受容を支援する啓発に繋げることを可能となる。今後、実施者養成研修プログラムを改訂し、実装に向けてロールプレイビデオなどの教材開発を進めていく。

F. 健康危険情報

特になし

G. 研究発表

[論文発表]

1. Kyoko Tanaka, Hiromi Tsujii, and Makiko Okuyama. Pediatric consultation: Present and future in Japan, *International Journal of Child and Adolescent Health*, 2021, 14(3), 283-290.
2. 田中恭子. 成人移行支援における心理社会的課題 [特集] 移行期医療, 2021, 小児内科, 53(8) 1197-1202.
3. 田中恭子. 児童精神科リエゾンとトランジション [特集] 児童精神科リエゾンと移行期医療, *精神科治療学*, 2021, 36(6) 636-645.
4. 田中恭子. 子どもの権利とコロナ禍の子どもたち 今こそ、子どもアドボカシーの実践を 2021, *小児内科*, 54(1). 148-153
5. Ryo Morishima, Yousuke Kumakura, Satoshi Usami, Akiko Kanehara, Miho Tanaka, Noriko Okochi, Naomi Nakajima, Junko Hamada, Tomoko Ogawa, Shuntaro Ando, Hidetaka Tamune, Mutsumi Nakahara, Seiichiro Jinde, Yukiko Kano, Kyoko Tanaka, Yoichiro Hirata, Akira Oka, and Kiyoto Kasai. Medical, welfare, and educational challenges and psychological distress in parents caring for an individual with 22q11.2 deletion syndrome: A cross-sectional survey in Japan. *The American Journal of Medical Genetics - Part A*, 2022, 188(1), 37-45. doi: 10.1002/ajmg.a.62485.

6 田中恭子 : [コロナ禍における] こどもの
のこころのケア, 日本医師会雑誌,
150(6), 997, 2021

[学会発表]

1. 子どもの高次脳機能のアセスメントと
支援, 田中恭子, 小児がん拠点病院長期フ
ォローアップ研修会, 2021/3/11 国内, web
(口頭) .

2. 小児慢性疾患患児のきょうだいのセル
フレポートによる心理社会的支援ニーズの
検討, 早川真桜子・大谷ゆい・平井ゆり・田
中恭子, 第124回日本小児科学会学術集会,
2021/4/20 一般演題(口演), 国内, web(口
頭) .

3. 小児がんのこどもの発達, 田中恭子, 小
児がん相談員研修, 2021/9/6 国内, 口頭.

4. 発達障害の子どもの医療受診支援, 田中
恭子, 第2回NCNP発達障害者支援研修:
指導者養成研修パートⅢ発達障害研修,
2021/11/25, 国内, web(口頭) .

5. AYA世代の意思決定支援, 田中恭子, 第
33回日本生命倫理学会年次大会生命倫理
学会, 2021/11/27 国内, web(口頭) .